

家庭内離婚

hayashi iku

林郁

筑摩書房

林郁（はやし　いく）

1937年、長野県に生まれる。

1960年、早稲田大学政治経済学部卒業。

小説に「糸の別れ」「風の声が聞こえる」、ノンフィクションに「満州・その幻の国ゆえに」「未来を紡ぐ女たち」「裁かれる農業」、共著に「戦争と女たち」「就職」などがある。

家庭内離婚

一九八五年十月三十日　初版第一刷発行
一九八六年四月二十日　初版第七刷発行

著　者／林　　郁

発行者／布川角左衛門

発行所／株式会社　筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八
電話東京二九一七六五一（営業）

二九四一六七二（編集）

振替東京六一四一二三

郵便番号一〇一一九一

印刷／多田印刷　製本／積信堂

©林郁　一九八五

Printed in Japan

ISBN4-480-85286-7 C0095

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが小社読者係宛に御
送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

もくじ

第一話	長男嫁のたたかい	5
第二話	リタイヤの日	68
第三話	フツ一の奥さん	111
第四話	ハイテク夫	149
第五話	進み妻の陰で	191

あとがき

裝幀
菊地信義

家庭内離婚

第一話 長男嫁のたたかい

老夫婦の躰が重なり合い、高まっては退く。夫婦揃っての午睡は珍しい。

雪子は洗濯機をまわしながら拭き掃除を始めた。電話が鳴った。

「こちらH電機本社の交換台です。ただいま札幌のGホテルから電話が入りました。ダブルのお部屋がとれたそうです。本日、勝成さんは外まわりで社に戻らないそうですので」

電話交換手が気をきかして自宅に知らせてくれたとわかったが、雪子は一瞬声がつまった。礼をいって受話器を置くと、汗がふき出た。

堅物の夫がついに行動し始めたのだ。喧嘩を売っても、離婚宣言しても、一切答えなかった治が、新婚旅行のような手順を踏んで、あの細身の女と。病気の親をわたしに看させておいて彼女と旅行にゆくとは。

雪子は雑巾をブラスタイルの床に叩きつけたが、朝子という相手の女性には嫉妬を感じなかった。一カ月前の雨の夜、治と朝子が相合傘で歩いているのを見たときも、嫉妬ではなく、仕事を

理由におそく帰る夫に、腹を立てたのだった。

今夜、夫が帰ったら問い詰めよう。……いや、黙っていよう。治は家庭の安泰を願っているから、騒ぎ立てたら旅行を中止する。黙って送り出せば、あの女性と結ばれる。そしてわたしから去る。もういやだ。舅・姑しゅうとじゅうとめの介護を押しつけられ、嫌いな男と夫婦関係を続けるなんて。別れるためにはそ知らぬ顔で夫を旅行に出すのだ。

雪子はプラスチックの床をきりきりとふいた。このマンションのダイニングキッチンには窓がなく、昼でも電灯が要る。生ごみの匂いが台所にこもり、隣室の窓をあけると、幹線道路の騒音がうるさい。

ダイニングキッチンの中に、東側の六畳が老夫婦、四畳半が夫、西側の六畳が長女と次女で、四畳半が末の息子と雪子の部屋、四DKとはいえ、七人がせせこましく顔をつき合っている感じだ。

雪子は気を鎮めようと外へ出た。エレベーターの前で見知らぬ若夫婦に会った。二人は揃いのブルゾンにスニーカー姿で、夫が赤ん坊を抱いている。わたしと治も揃いのスポーツシャツで仲むつまじく出かけたこともあったのに。

わたしが治と寝るのがいやになったのは、三人目を生んだころからだ。三人の育児をひとりで背負いこみ、末の子の泣き声や授乳で夜中に何度も起き、昼寝の余裕もなかった。あのころは、朝まで通して寝たいというのが唯一の望みだった。

そういう状態を告げると、夫は「愚痴をいうなよ」といい、わたしをなだめるために抱こうとした。拒むと、夫の機嫌がひどく悪くなるから、わたしは仕方なく応じた。引っ越したばかりの団地には仲間がおらず、人を頼む経済的余裕もなく、自分の体力だけが支えだった。

「洗濯物をたたむくらい手伝ってよ」と夫にいうと、

「おれもノルマで大変なんだ。I社との競争に勝ちぬくために外でがんばってるんだから、うちの仕事まではできないよ」と夫は怒鳴り返した。わたしは長女の楓に^{かえで}当たり散らした。

だれの助けもなく、三人の子を夢中で育てた日々を振り返るたび、わたしはいつもあの歌を思い出す。

泣く子負^おい 戸外に出づれば 夜風泣き

故郷いづこ 青春いづこ

でも、危ない橋を渡りながら、何とか三児は丈夫に育ったのだからいいじゃないの、と自分にいきかすのだが、いまでも不満や悲しみは消えない。

治の話題は仕事のことだけで、女の思いを伝えようとしても通じなかった。でも、もういい。わたしはだいたい前に夫に期待するのはやめたのだ。今度の旅行で状況は変わるだろう。治は朝子と再婚すればいいのだ。それで仕事戦争を勝ちぬけるかやってみたらいい。

朝子という女性^ねは脳軟化の舅を見るだろうか。息子べったりの姑がいるだけで音をあげるだろう。治はH社を辞めて看護するわけにはゆかないだろうし……。

あとのことは知らない。わたしはさよならだ。でも、わたしは三児をかかえて何をして食べてゆこうか。彼の給料では養育費もどこおるだろう。

雪子の胸は渦巻き、頭の中でやぶ蚊が唸る。

雪子はアーケードをくぐり、マーケットに入った。すると、きりりと頭が反転し、夕食の献立が浮かんた。家にはない材料、必要な食品が頭の中で整理され、籠をさげた身体からだがてきばと動く。さつま芋、茄子、ピーマン、卵、牛乳、豆腐。

結婚十九年、家事が習い性になっているが、今の生活を脱したくて雑文書きや校正もしている。一流のT女子大の社会学科を出たのに、卒業と同時に治と結婚した。

英会話学校で目立って発音のいい治にひっかかったのが、間違いのもどだった。せめて子どもが一人だったら、一人前のフリーライターになれたのに、治は子だくさんを望んだ。ぜひ三人目を生んでほしいと頼んだ治に、子をおしつけてやりたい。でも、三人の子は可愛い。子どもは絶対に治に渡すものか。

離婚するといいたが、子のためとか、年寄りにしがみつかれてとか言いわけばかりして、わたしは臆病なのだ。……でも、わたしは三人の子をちゃんと育てたわ。あの朝子という人は、わたしより四つも上、四十五歳にもなって結婚したことがなく、治のような男にひっかってお気の毒ね。治は弁が立って、ほめ言葉と英会話が抜群なだけで、頭はよくないのよ。あの気むずかしい、いばりん坊の老後を見てくださるなら、ぜひぜひお願いしたいわ。

雪子がかつて自分も治と恋をし、彼は有能で頼れる男だ、頭もいいと思ったことは忘れ、「のしをつけて差しあげますから」と声に出していった。その声は車の騒音にかき消された。

雪子はマンションの部屋のドアをそつとあけた。悪臭が鼻を搏った。舅の清太がドアの前に座って「ぼた餅をもらいにゆく」と独り言をいつている。先刻ふいたばかりの床に尿が流れている。雪子は仏頂面ぶつちやうめんで清太の濡れた寝巻きを脱がせた。越中ふんどしをはずし、便所につれてゆき、ホースの先をもってシーシーといった。血色のよい先端がびんと立ち、排尿の気配はない。雪子は舅の尻をつねりたかった。

耳の遠い姑の玉江は雪子の帰宅に気づかず、テレビを見ているらしい。雪子は大声で玉江をよんだ。

「ああ、ママ、お帰りなさい」

老鶏が歩くような恰好で玉江が現れ、ほっほっと笑った。意味のない愛想笑いは玉江の癖である。

「おかあさん、おとうさんに新しい寝巻きを着せてください」

「あたし、もう年寄りだから勘弁してね。二度ぼこなんですから」

子ども返りしたという「二度ぼこ」なる台詞せりふをくり返すのが、雪子にはたまらない。子どもというのは、もっと愛らしいものなのよ、甘えないで、と雪子には思い、床の尿をふく手が乱暴になった。

三年前、同居したとき、舅のボケは始まっていたが、玉江が夫を看る約束だった。初めのうち、玉江は夫にかかりきりで介護していた。が、三カ月後にはリウマチで腕が動かなくなり、嫁の雪子に頼った。リウマチは少し好転したようだが、そのころから「あたしは二度ほこだから」を口にしはじめたのだ。

幹線道路に面したマンションは、緑や散歩道に恵まれず、公園に行くのには歩道橋を渡らねばならない。この環境が玉江の老化と清太の脳軟化を進めたようだ。治は郊外の一戸建てに移ろうといったが、子どもたちが転校をいやがった。都心のこの近くに一戸建てを買う資金をもておらず、多額のローンも大変なので、治は引越しをあきらめたのだ。

玉江が流し台の脇に来た。

「ママ、ママさんがお留守の間に、お電話ありましたよ。ハナカミニイサン、キップ二つとりに来てくださいって」

「え？……それ何の事ですか」

「ハナカミニイサンですって」

雪子は汁のだしをとり、精進揚げの野菜を切った。耳の遠い玉江は電話をかけてくる人の名を聞き間違えたり、時には相手が用件をいう前に切ってしまう。先方が違う苗字みょうじを言ったから切ったというのだが、「樹々わか子」は雪子の筆名である。「もう一つ名前があるんですよ」と筆名を何度も玉江に教えたが、ききめがない。この老婆は意地悪ではなく、忘れるのだと雪子は思っ

いるが、電話を切られたためにF誌のルポルタージュの仕事が流れたときは、姑をぶん殴りたくなつた。「おかあさんはもう電話に出ないでいいですから」と雪子はきつくいった。

雪子は夕食の仕度^{したく}を急いだ。精進揚げの油が煮え立ったとき、電話が鳴った。雪子は玉江を目で制し、火をとめて走り、受話器を握った。生協世話人の井手さんだった。

「おばあちゃんに伝言したんですが、早くとりに来てください」

「はあ？」

「注文なさつたポテトチップスとティッシュを」

「あ、どうも、すみません」

そういえば玉江は、ティッシュのことを鼻紙という。「キップ二つ」というのは、ポテトチップ二個のことらしい。

雪子は品物をとりに井手さんの家へ走った。

その夜、治は早めに帰宅し、なめらかな高い声で、「かあさん、かあさん」と呼んだ。テレビを見ていた玉江は振り向き、

「まああ、治さん、お帰りなさいませえ」と華やいだ声をあげた。

「かあさん、風邪の具合は？」

「今日はお仕事うまく片ついたの？」

玉江は少女のように小首をかしげ、曲がつた腰でうんしょと、食堂の椅子を引いた。

「疲れたでしょう。さあおかけなさい」

雪子は焼茄子に削り節をかけ、揚げたての精進揚げを皿に盛る。油に酔った胸が、母と息子の甘い声で、よけいむかつく。

治は母と三十五歳の年の差があるから孝行息子に見えるが、年が近かったら母子相姦ふうになるところだった、と雪子は思う。

和服に着がえた治は椅子に座るなり、「ビール」と命令口調だ。雪子は大根をおろしながらいった。

「自分で出して」

玉江が背を丸めて冷蔵庫からビールを出し、

「冷めたい。リウマチで手首が」と悲しげな声を出した。

「大丈夫？　ぼくが栓ぬくから、かあさんは座ってなさいよ」

治は母のコップにビールを少し注いだ。老母はうれしそうに相伴する。

「子どもたちはどこへ行ったんだ」

「学校の部活でしょう」

雪子は流し台に向かったままいった。

玉江は息子の方に身を寄せ、「内緒の話ですけどねえ」と、いつもの長口舌が始まった。玉江の「内緒話」は、スーパールの横でスーパーより安いサンダルが売られていたとか、以前住んでい

た所には老人クラブのお風呂があつて入りに行つてたのに、とかいう話だ。どんな話でも治は大きくうなづく。すぐに一方の耳から抜けてしまうようでもあるが、相槌あいつちの打ち方は真情あふれる感じだ。治は妹や姉、他人の話にも深くうなづく、「ほう、なるほど」と、「へえー、そお」を連発する。根っからの親孝行人間、親切人間の感じだ。

この巧まざる相槌とはめ言葉に、朝子という女性はころりとまいてしまったに違いない。わたしも彼にほめられるたび感激し、結婚してしまったのだ。いつのまにか、わたしが冷ややかになり、彼もわたしをほめなくなった。

「ねえ、このことは雪子さんも聞いて」

玉江が手まねきし、声を低めた。

「母親が外へ出るとね、子どもはこわいことになるのよ。お隣の男の子ったら、金魚を鉢でまつぶたつにちよん切つて遊んでたそうよ。隣のだんさんホモですつて。ホモつて何でしょう？ それで夫婦仲が悪くて、奥さん働きに出て、カギっ子でしょう」

「そんなこと誰から聞いたんですか」

「奥さん、きつい性分しょうぶんで仕事をやめないうですつてよ」

「奥さんを責めることないでしょう」

「ひとりっ子は可哀そう。男の子なのに部屋にこもつて」

玉江はしわがれ声で切れ目なく話し続ける。雪子は首を振った。治が雪子を見ていった。

「自分のこと言われたように抗弁することないだろう。うちの子は金魚をちょん切ったりしないからいいじゃないか」

子どもの話になった。噂をすれば影で、桜と榊さかきが一緒に帰宅した。

「漫画の立読みで榊と一緒にあったんだ」と桜はいい、「ああ、ハラすいたあ」と騒いだ。
「もっと落ち着いたらどうだ」

治の額に青筋が浮いた。治は次女の桜には気むずかしい。桜はなぜか父親に少しも似ていない。ちぢれつ毛で、目、鼻、手足、すべて大づくりだ。自称「鬼娘」で、中学生になってから男言葉を使うようになった。

桜はあつというまに揚げ物とサラダを平らげ、卓を離れた。

「ぼくの名前を知ってるかい。ピーマン小僧、もとえ、ピーマンオヤジでありんすよ。ぶりん！ からっぽ、おっし！」

桜はつくり歌をうたい、父の背中に向かい、空手の突きの仕草をした。

「ピーマンの中身は空からっぽでありんす。おっし！」

治が振り向いた。桜は自室にかけこんだ。

榊はくちやくちやと御飯を噛み、ビューと音をたててすまし汁をすすする。

「榊、音をさせて食べるの、おやめ。下品よ」

雪子は「パパに似て」という言葉をのみ込んだ。